

ひふみ神示 11 サブタイトル身魂の洗濯

その 69

富士とは神の山のことぞ。神の山はみな富士というぞ。身晴らし台とは身を張らすことぞ、身を張らすとは、身の中を神にて張ることぞ。臣民の身の中に一杯に神の力を張らすことぞ。富士を開くとは心に神をみたすことぞ、ひむかはその使いぞ。ひむかは神の使いざから、九の道を早う開いて呉よ、早う伝えて呉よ、ひむかのお役は人の病をなほして神の方に向けさすお役ぞ。この理をよく心得て間違いないように伝えて呉よ。

この神示よく読みて呉よ、読めば読むほど何もかも分かりて来るぞ、心とは神民の申す心ではないぞ身魂とは神民の申す身魂でないぞ身たまとは身と魂と一つになっているものを云うぞ、神の神民身と魂の分け隔てないぞ身は魂、魂は身ぞ外国は身ばかりの所あり魂ばかりの所あり神は身魂の別ないぞ、このこと分かりたら神の仕組みがぼつぼつ分かるぞ身魂の洗濯とは心の洗濯とは、魂ばかりの洗濯でないぞ、よく気をつけて呉れ神の申すことちがはんぞよ。

世の元からヒツグとミツグとあるぞヒツグは \ominus の系列ぞ、ミツグは \bigcirc の系列ぞ。ヒツグはまこと神の臣民ぞ、ミツグは外国の民ぞ。 \ominus と \bigcirc と結びて一二三となるのざから、外国人も神の子ざから外国人も助けなならんと申してあろうがな。一二三唱えて岩戸あくぞ。神から見た世界の民と、人から見た世界の人とは、さっぱりアベコベであるから、間違わんよ様にして呉よ。ひみつの仕組みとは一二三の仕組みざ、はよう一二三唱えて呉よ、一二三唱えると岩戸あくぞ。

今度の戦は \ominus と \bigcirc との大戦ぞ。神様にも分からん仕組みが世の元の神がなされているのざから、下の神々さまにも分からんぞ。何が何だか誰にも分からんようになりて、どちらも丸潰れと云う所になりた折、大神のみことによりてこの方らが神徳だして、九分九厘という所で、神の力がどんなにえらいものかと云うこと知らして、悪の神も改心せなならんように仕組んであるから、神の国は神の力で世界の親国になるぞ。 \ominus と \bigcirc とは心の中に「キ」があるか「キ」がないかお違いであるぞ。この方三五七の神とも現れるぞ。

- ① ばかりでもならぬ、 \bigcirc ばかりでもならぬ。 \ominus がまことの神の元の国ぞ。元の神の国の臣民は \ominus でありたが、 \ominus が神国に残り \bigcirc が外国で栄へてどちらも片輪となったのぞ。
- ② もかたわ \bigcirc もかたわ、 \ominus と \bigcirc と合わせてまことの \ominus の世にいたすぞ。今の戦は \ominus と

○との戦ぞ、神の最後の仕組みと申すのは○に\いれることぞ。○も五ぞ\も五ぞ、どちらも、このままでは立ちて行かんぞ。一厘の仕組みとは○に神の国の\をいれることぞ、よく心にたたみおいて呉よ。

悪の世であるから悪の臣民世に出てござるぞ、善の世にグレンと引っ繰り返ると申すのは善の臣民の世になることぞ。今は悪が栄えているのざが、この世では人間の世界が一番遅れているのざぞ、草木はそれぞれに神のみこころのままになっているぞ。一本の大根でも一粒の米でもなんでも貴くなったであろうが、一筋の糸でも光でてきたであろうがな、臣民が本当のつとめしたなら、どんなに尊いか、今の臣民には見当とれまいがな、神が御礼申すほどに尊い仕事が出来る御魂ぞ、殊に神の国の臣民みな、まことの光あらわしたなら、天地が輝いて悪の身魂は目あいて居れんことになるぞ。結構な血筋に生まれていながら、今の姿は何事ぞ、神はいつまでも待てんから、いつ気の毒出来るかしれんぞ。戦恐れているが臣民の戦位、何が恐いのぞ、それより己の心に巢食うているあくの身魂が恐いぞ。

神界は七つに分かれているぞ、天つ国三つ、地の国三つ、その間に一つ、天国が上中下の三段、地国も上中下の三段、中界の七つぞ、そのひとつひとつがまた七つに分かれているぞ、その一つがまた七つ筒に分かれているぞ。今の世は地獄の二段目ぞ、まだ一段下あるぞ、一度はそこまで下がるのぞ、今一苦勞あると、くどう申してあることは、そこまで落ちることぞ、地獄の三段目まで落ちたら、もう人の住めん所ざから、悪魔と神ばかりの世ばかりなるぞ。この世は人間に任しているのざから、人間の心次第ぞ、しかし今の臣民のような腐った臣民ではないぞ、いつも神かかっている臣民ぞ、神かかるとすぐに分かる神かかりではなく、腹の底にシツクリと神鎮まっている臣民ぞ、それが人間の誠の姿ぞ。いよいよ地獄の三段目に入るから、その覚悟でいて呉よ、地獄の三段目にはいることの表は一番の天国に通ずることぞ、神の誠の姿と悪の見られんさまと、ハッキリ出て来るのぞ、神と獣と分けると申してあるのはこのことぞ。何事も洗濯第一。

よく世の中の動きを見ればわかるであろうがな。汚れた臣民あがれぬ神の国に上がってきているではないか。いよいよとなりたら神が臣民にうつりて手柄さすなれど、いまでは軽石のような臣民ばかりで神かかれんぞ。早う神の申すこと、よく聞いて生まれ赤子の心になりて神の入れ物になりて呉よ。一人かいしんすれば千人助かるぞ、今度は千人力与えるぞ、何もかもアクの仕組みはわかりているぞ、いくらでも攻めて来てござれ、神には世の元からの神の仕組みしてあるぞ、学や知恵でまだ神にかなうと思うてか、神にはかなはんぞ。

この方この世のあく神とも現れるぞ、闇魔とも現れるぞ、アクと申しても臣民の申す悪ではないぞ、善も悪もないのざ、さばきの時に来ているのにキづかぬか、その日その時裁かれているのざぞ、早う洗濯せよ、掃除せよ、磐戸はいつでもあくのざぞ、善の御代来るぞ、悪の御代来るぞ、悪と善とたてわけて、どちらも生かすのざぞ、生かすとは神のイキに合わすことぞ、イキ合えば悪は悪でないのざぞ。この道理よく肚に入れて、

かみの心早うくみ取れよ、それが洗濯ざぞ。

日本の国は小さいが天と地との神力強い、神のマコトの元の国であるぞ。洗濯と申すのは何事によらん、人間心すてて仕舞いて、知恵や学に頼らずに、神の申すこと一つもうたがはず生まれ赤子の心のうぶ心になりて、神の教え守ることぞ。ミタマ磨きと申すのは、神から授かっているミタマの命令に従ふて、肉体心すててしまふて、神の申すことにそむかん様にすることぞ。学や智を力と頼むうちはミタマは磨けんのぞ、学越えた学、智越えた智は神の学、神の智ざと云うこと判らんか、今度の岩戸開きはミタマから、根本からかえてゆくものざから、中々ぞ、天災や戦ばかりでは中々らちあかんぞ、根本の改めぞ。小さいことと想っていると判らんことになると申してあろがな、この道理よく肚に入れて下されよ、今度は上中下三段にわけてあるミタマの因縁によって、それぞれに目鼻付けて、悪も改心さして、善も改心さしての岩戸開きざから、根本からのつくりかへるよりはどれだけ難しいか、大層な骨折りざぞ。叱るばかりでは改心出来んから喜ばして改心することも守護神にありてあるのざぞ、聞き分けよい守護神殿少ないぞ、聞き分けよい悪の神、早く改心するぞ、聞き分け悪き善の守護神あるぞ。この道の役員は昔からの因縁によりてミタマ調べて引き寄せて御用さしてあるのざ、めったに見当くるわんぞ、神が綱かりけたらなかなかはなさんぞ、逃げれるならば逃げてみよれ、くるくる廻ってまた始めからお出直して御用せなならん様になって来るぞ。ミタマ磨け出したら病神などドンドン逃げ出すぞ。出雲の神様大切申せと知らしてあること忘れるなよ。子の年真ん中にして前後十年が正念場、世の立替へは水と火とざぞ。

ひふみ神示 11 サブタイトル身魂の洗濯

その 70

「富士とは神の山のことぞ。神の山はみな富士というぞ。身晴らし台とは身を張らすことぞ、身を張らすとは、身の中を神にて張ることぞ。臣民の身の中に一杯に神の力を張らすことぞ。富士を開くとは心に神をみたすことぞ、ひむかはその使いぞ。ひむかは神の使いざから、九の道を早う開いて呉よ、早う伝えて呉よ、ひむかのお役は人の病をなほして神の方に向けさすお役ぞ。この理をよく心得て間違いないように伝えて呉よ。」

読み解き

富士とは不二のこと（二つにあらず）身と霊が一つになっている人間の状態を指します。身の中に神にて張るとは、外界と繋がった心の状態であると「中今」今という瞬間の動きに身と霊使っている状態は何も頭では考えずにいます。その時神が入る。ということ富士を開くとは心を光りに向けよということ。

ひむか＝日向　つまり光りに向いている人。光りに向いている人は神の使いと云っている。九（く）のみちひらくとは、今苦しんでいる人達は影を見ているため、それを光りに向くように伝えれば苦（く）が楽と来なる。つまり開けるし、光りを向くと病も治るようになる。かつてキリストは病を治すのに相手に触れて「光りあれ」と云ったと何かで読んだことがあります。

・ ・ その 71 に続く

ひふみ神示 11 サブタイトル身魂の洗濯

その 71

「この神示よく読みて呉よ、読めば読むほど何もかも分かりて来るぞ、心とは神民の申す心ではないぞ身魂とは神民の申す身魂でないぞ身たまとは身と魂と一つになっているものを云うぞ、神の神民身と魂の分け隔てないぞ身は魂、魂は身ぞ外国は身ばかりの所あり魂ばかりの所あり神は身魂の別ないぞ、このこと分かりたら神の仕組みがぼつぼつ分かるぞ身魂の洗濯とは心の洗濯とは、魂ばかりの洗濯でないぞ、よく気をつけて呉れ神の申すことちがはんぞよ。」

読み解き

その 71

身魂とは身と魂が一つになっている状態のもの、つまりいつでも外界のキと繋がった状態の身体のことを指します。もともとは身と魂は一つであった第一精神文明の栄えた時代 外国は身ばかりの所あり言霊ウの心の使い方で我良しの心の使い方つまり須佐男の心の使い方（言霊ウ）のこと（西洋諸国など）今の第二の物質科学文明時代のこと、また魂ばかりのところつまり宗教ばかりで概念的な考えばかりで行動が伴わない心の使い方つまり月読みの心（言霊ア）の使い方（東洋 仏教）を云います。

本来は身と魂一つで身の中にキの繋がりがある状態これを天照らすの心の使い方（言霊エ）と言います。身魂の洗濯とは魂ばかりの洗濯ではないぞ心の洗濯と云っています。心の洗濯とは心で思うとキの流れが起こります。その氣の流れで身を動かすときに使って始めて心の洗濯になります。 行動が伴わないと月読みの心になってしまいます。

一人一人が天照らすの心を持ちその心で行動し始めることがその人の岩戸開きになります。世の中の岩戸開きはすでに終わっています。つまり言霊布斗麻邇（日本語の言霊の秘密）が明らかに世に出された時点が岩戸開きです。この状態の心の持ち方で進む世界が、これから起こる第三の精神文明と物質文明が統合された文明である。

・ ・ その 72 に続く

ひふみ神示 11 サブタイトル身魂の洗濯

その 72

「世の元からヒツグとミツグとあるぞヒツグは神の系列ぞ、ミツグは身の系列ぞ。ヒツグはまこと神の臣民ぞ、ミツグは外国の民ぞ。神と身と結びて一二三となるのだから、外国人も神の子だから外国人も助けなならんと申してあろうがな。一二三唱えて岩戸あくぞ。神から見た世界の民と、人から見た世界の人とは、さっぱりアベコベであるから、間違わん様にして呉よ。ひみつの仕組みとは一二三の仕組みぞ、はよう一二三唱えて呉よ、一二三唱えると岩戸あくぞ。」

読み解き

ヒツグ＝霊嗣ぐ ミツグ＝身嗣ぐ とすると分りやすい ヒツグはまことの神の臣民ということとは日本語を使う臣民ということ、日本語は霊と音の組み合わせで出来た言葉である。 霊と音つまり父韻（神）と母音（宇宙のキ）が掛合わさって氣の流れとなり音（霊の身）と組み合わせ

で日本語となります。言霊布斗麻邇 五十音言霊音図（五十^{いわと}音）となります。 霊嗣ぐは宇宙と自分は同じもの元は一つであったと言う心の使い方で始まります（言霊工）第一精神文明 心の使い方思う となります。

。身嗣ぐとは最初から自分とは別なものがすでに宇宙にありそれを分析化学する心の使い方をする人々と言うことである。須佐男主体の心（言霊ウ） 物質科学文明 心の使い方考える となります。

日本語を使うだけでそこにキの流れが起こります。言霊布斗麻邇が表に出る、つまり隠されてきた日本語の秘密が明るみに出される岩戸開きとはこの事を指します。かつての第一精神文明の記憶が人々の心に甦る。

神と身と結びてとは第一精神文明の主催者と第二物質文明の統一者が一つになって第三文明の幕開けが起こるということです。（一二三は第一第二第三の文明へということですが。）

一二三唱えて岩戸開くぞとは一二三祝詞は天照らすの心の使い方を祝詞にしたものです。だからその使い方が心に静まるとその人の心の岩戸は開けます。 祝詞を唱えると云うことは形を作るという行為です。唱えるとそれが自分の行動を何も考えずただ今中で日々生活すると中に入った神が祝詞に導かれその心を導いてくれます。

ただこの時中今の状態が出来てないと祝詞を唱えても何も変わらないと思われます。またその祝詞の意味が理解できていないとそうはならないと思われます。一二三祝詞の意味は「古事記と言霊」島田正路氏著書の中に書かれてあります。

神から見た世界の民と、人から見た世界の民とは、さっぱりアベコベであるからというのは霊的な活動を先に行いその後行動をすると云うこと。（合気道から見ると心を先に使ってその後身体がついていくこと）そうでないとキの流れ出た（神と一体となった）動きとならないから創造的活動ができないのであるということ。

・ ・ その 73 に続く

ひふみ神示 11 サブタイトル身魂の洗濯

読み解きその 73

「今度の戦は「神」と「身」との大戦ぞ。神様にも分からん仕組みが世の元の神がなされているのだから、下の神々さまにも分からんぞ。何が何だか誰にも分からんようになりて、どちらも丸潰れと云う所になりた折、大神のみことによりてこの方らが神徳だして、九分九厘という所で、神の力がどんなにえらいものかと云うこと知らして、悪の神も改心せならんように仕組んであるから、神の国は神の力で世界の親国になるぞ。神と身とは心の中に「キ」

があるか「キ」がないかお違いであるぞ。この方^{みろく}三五七の神とも現れるぞ。」

読み解き 島田正路氏著書コトタマ学会報誌上より参照

精神文明「神 精神」天津日嗣の命「瓊瓊杵尊^{ににぎのみこと}」と物質科学文明「身 物質」大国主命の覇権争いである。つまり神話天孫降臨の国譲りの預言にあるように、建御雷神と大国主の命の国譲りの場面で建御雷神^{たけみかづち}と建御名方神^{たけみなかたのかみ}の力比べで建御雷神が勝ちを収め天の神が主導権を譲り受けま

す。この事を云っています。決して武力の争いではないのです。建御雷神が「十拳劍^{とつかのつるぎ}」を抜いて

波の上に逆様に差し立てて、その剣の切先に安座^{あぐら}をかいて大国主命にお尋ねになる・・・」とある。自己自身である母音、貴方自身である半母音、それらに挟まれた八つの父韻系十の言霊の自覚が整っている判断力を十拳劍という。すなわち建御雷神の判断力である。その十拳劍を「波の上に逆様に立てて、その切っ先に安座をかいて」とある。「剣をたてて」あれば、その剣の威力を正常に発揮することである。

「逆様に立てる。」となると、威力を発揮するとしても逆作用であることを示している。逆作用とは何か。それは相手が自分の事で分らないもの、どうしてよいか迷っているものを質問させて、それを言霊の原理で悉く解答を与えてやることである。普通に「剣を立てる」とは言霊の原理の真理を説くことであり（演繹的）、「逆に立てて」とは言霊の原理そのものを説くのではなく、相手の事情に応じて原理に照らし合わせてその不明な点を解決してやる（帰納的）ことである。そしてその際に天鳥船である言霊ナ（名前）が必要となるのである。（日本語とは物事の実相を現わす世界で唯一の言葉なのでナをつけると云うことはそのまま実相を現わす為説明の必要がない。）人が、または社会がどうしてよいか分らずに迷うと云うことはどういうことなのだろうか。それは物事の真実の姿が見えないためである。真実の姿を見つけてそれに見合った名を与える事によって人は一つの事を解決したと云うことになる。

真実を見ること、それは建御雷神の五十音言霊図に照らす判断力であり、それに正当な名を与える作業は天の鳥の石楠船^{いわくすね かみ}の神役目である。十理の判断力で五十音言霊を組んで澄まして、物事の内容を現わす名（船）を確定することである。この二神の働きが両々相まって如何なる難問も解決して余すところがないことになる。

それで大国主命は国譲りに同意するのである。

みろくの神とは国常立の神で言霊工を習得した人（聖り＝霊知り）のことである。

・ ・ 74に続く

ひふみ神示 11 サブタイトル身魂の洗濯

その74

「霊」ばかりでもならぬ、「身」ばかりでもならぬ。「霊と身一つになった国」がまことの神の元の国ぞ。元の神の国の臣民は「霊と身一つになった国」でありたが、「キ=霊」が神国に残り「身」が外国で栄へてどちらも片輪となったのぞ。「霊」もかたわ「身」もかたわ、霊=キと身と合わせてまことの神の世にいたすぞ。今の戦は「霊=キ」と「身」との戦ぞ、神の最後の仕組みと申すのは「身」に「霊=キ」入れることぞ。「身」も五ぞ「霊=キ」も五ぞ、どちらも、このままでは立ちて行かんのぞ。一厘の仕組みとは「身」に神の国の「霊=キ」をいれることぞ、よく心にたたみておいて呉よ。」

読み解き

その74

伊耶那岐太神の禊祓の説明が参考になります。参考島田正路著書より

主観的世界も我が身、次々と人間の経験知によって考案される物質科学の客観世界も我が身、という主観・客観をひっくるめた宇宙世界唯一の文化創造者の立場にあることが霊と身一つになった立場それで構成された国が神の国の臣民ということ

主観的真理である五十音言霊図の原理でもって、客観的学問・文化を審判し、整理する。心に確立保存されている五十音言霊の原理も、次々に考案されて来る外国文化も、人類文明創造上の自らの中に起こって来たもの、自らの責任として処理していくこと

一つの主張を自らの経験知に照らして批判し、審判する、これは言霊オの経験知の世界の仕事である。これに対し、他の主張も自らの主張も、両方理解した上で、人間英智の根本法則に従ってその両方の主張の調和の道の方向を指示する事が言霊エより現出する英智の立場である。

言霊エの心を使い言霊ウ・オの世界にいる人々を導くことが「身」に神の国の「キ」を入れること。

・ ・ その75に続く

ひふみ祝詞

大和石上神宮に伝わる ひふみ四十七文字 「布留の言本日文四十七文字」

ヒフミヨイムナヤコトモチ ロナネシキル ユキツワヌ ソヲハタクメ カウオエニサリエテ
ノマスアセエホレケ

意味

ヒフミヨイムナヤコトモチ

人間精神の最高の規範である天津太祝詞音図の横10個の配列すなわち自覚された主体と客体

の双方を結んで現象を起こさせる八つの父韻の原律をもって

ロナネシキル

耳に飛び込んで来た言葉を、天津太祝詞音図の配列順「イチキミヒリニイシキ」で仕切って見よ

ユキツワヌ

言葉の意味を最初から結果を順に横に結べ

ソヲハタクメ

それを言霊図に示される言霊をもって組め

カウオエニサリヘテ

伝わってきた相手の言葉を言霊でハッキリと順序よく組んで実相が判明すると、それに対する答えが心の中に焼き付くごとく「力」と浮かび上がってくる。その答えをウオエすなわちウ（欲望）オ（経験知）エ（創造叡智）の三つの次元に区別して

ノマスアセエホレケ

愛と慈悲の心で創造のための結論を言葉の筋道がすっきり通るように宣べよ、

まとめて

「天津太祝詞音図を鏡として相手の言葉を審判・判断して、その内容を言霊にまで還元して実相を余すところなく把握し、その上で相手が新しい創造の生命を得られるように、ウオエの各次を混同することなくはっきりとその行く道を宣べ指示せよ」

ひふみ神示 11 サブタイトル身魂の洗濯

その75

「悪の世であるから悪の臣民世に出てござるぞ、善の世にグレンと引っ繰り返ると申すのは善の臣民の世になることぞ。今は悪が栄えているのざが、この世では人間の世界が一番遅れているのざぞ、草木はそれぞれに神のみこころのままになっているぞ。一本の大根でも一粒の米でもなんでも貴くなったであろが、一筋の糸でも光でてきたであろがな、臣民が本当のつとめしたなら、どんなに尊いか、今の臣民には見当とれまいがな、神が御礼申すほどに尊い仕事が出来御魂ぞ、殊に神の国の臣民みな、まことの光あらわしたなら、天地が輝いて悪の身魂は目あいて居れんことになるぞ。結構な血筋に生まれていながら、今の姿は何事ぞ、神はいつまでも待てんから、いつ気の毒出来るかしれんぞ。戦恐れているが臣民の戦位、何が恐いのぞ、それより己の心に巢食うているあくの身魂が恐いぞ。」

読み解き

その75

悪の世とは須佐男の支配する第二の物質科学文明つまり欲望の世界・競争社会・弱肉強食・生存競争社会であるから悪の臣民世に出ている。これをひっくり返し善の臣民の世になること、今は悪が栄えているから人間が一番遅れている。本来なら尊い仕事が出来る御魂、殊に神の国（日本語を話す国＝霊の本の国）

今の姿は何事ぞつまり言霊ウ・オの世界に浸っていて悪になって、言霊エをかつて使って生活していた霊知りの国民はどこに 今自分の心に住む言霊ウ（欲望）と言霊オ（経験知）で生活している己の心が一番怖い

今の日本人の他人を思いやる心は古代日本人の心をかろうじて引き継いでいる。しかし外国からの文化に浸かり物質優先の欲望主体の世界にどんどん影響を受けていると云うこと

・ ・ その76に続く

ひふみ神示 11 サブタイトル身魂の洗濯

その76

「神界は七つに分かれているぞ、天つ国三つ、地の国三つ、その間に一つ、天国が上中下の三段、地国も上中下の三段、中界の七つぞ、そのひとつひとつがまた七つに分かれているぞ、その一つがまた七つ筒に分かれているぞ。今の世は地獄の二段目ぞ、まだ一段下あるぞ、一度はそこまで下がるのぞ、今一苦勞あると、くどう申してあることは、そこまで落ちることぞ、地獄の三段目まで落ちたら、もう人の住めん所ざから、悪魔と神ばかりの世ばかりなるぞ。この世は人間に任しているのざから、人間の心次第ぞ、しかし今の臣民のような腐った臣民ではないぞ、いつも神かかっている臣民ぞ、神かかるとすぐに分かる神かかりではなく、腹の底にシツクリと神鎮まっている臣民ぞ、それが人間の誠の姿ぞ。いよいよ地獄の三段目に入るから、その覚悟でいて呉よ、地獄の三段目にはいることの表は一番の天国に通ずることぞ、神の誠の姿と悪の見られんさまと、ハッキリ出て来るのぞ、神と獣と分けると申してあるのはこのことぞ。何事も洗濯第一。」

読み解き

これは難解です。最初の下りはそうなっているとしか言えません。その次の地獄の二段目に今ある状態から一段更に下がる地獄の三段目までなるとするのは読んでみます。

読み解きについて先ず悪とは何かについて島田正路氏が師の小笠原氏に尋ねられたことが参考になります。

「私が言霊学の先師、小笠原孝次氏の門をたたいて間もなく、私は先師に「この世に神があるというものがあるとする時、何故人間に悪があるのですか。神があるなら、世の中にこれ程多くの悪がなくて社会文明を創造していく事が出来ないものでしょうか。」師は云いました。「お答えしましょう。その前に貴方に一つ質問します。悪とは何ですか。明瞭に言って下さい。」私は言いました。「例えば人を殺す事です。」「戦争で敵兵を大勢殺して勲章をもらった人がいます。どういうことでしょうか。」「私利私欲で殺す事、これは悪です。」「戦争で自国の利益を守るために宣戦布告をし、何万、何

十万人の人々を殺し、戦いに勝ち、大英雄と讃えられた大統領がいます。殺さなければ我が身が殺される場合もあります。これについてはどう思いますか」問答をしている間に私は何が何だか分からなくなってきました。勢い込んだ口ぶりが当惑に変わりました。その時、師は次のように教えてくれたのでした。

「本来悪は無いものなのです。いわば光りに対する影のようなものです。影ばかり見ている人には影があたかも実在するもののように思われるでしょう。けれど影は本来ないものです。光が当たれば瞬間に消えてしまいます。影がどこかへ行ってしまったのではありません。悪も本来無いものです。心の光りが当たれば、その瞬間消えてしまいます。どこかへ移動して無くなった訳ではありません。ですから本来悪は存在しません。強いて言うならば、悪は善が何であるか人間に分るためにのみ仮に存在すると言うことが出来るでしょう」

この教えを聞いている間に、私は深い感動に包まれていきました。師は善悪についてのみ話をされました。けれど美醜・真偽・得失の相違についても同様のことが言えることに気がついたのであります。」

その内容を踏まえて。

地獄の三段目つまり後一段とは短山（ひきやま・影の世界）のア段（畜生）まで落ちるとその裏が高山（たかやま・光りの世界）のア段（縁覚）になるのでそこまで行くと云うことなのでしょう。そうすると悪魔と神ばかりに成るとは心がけ次第で悪魔と神に分かれると云うことなのでしょう。それは自覚があるかないか 光りか影かの違いだけで大きく変わり、外から見ると同じように見える。そこは人が住めない（畜生界）地獄の世界 悪魔（裏の欲望にとりつかれた）と神がかった臣民（その表の神がかった）だけになるというのでしょうか。 神と獣と分けるとはこのことを指すのでしょうか。

地獄の三段目はその表は天国つまりそこまで落ちないと天国には行けないようです。はっきり分かれてくるということ。

島田氏の文を参照します

下記の説明参照ください。

高山 高天原 自覚	ワ キ エ ヲ ウ		ア イ エ オ ウ
短山 黄泉国 無自覚	ウ ヲ エ キ ワ		ウ オ エ イ ア

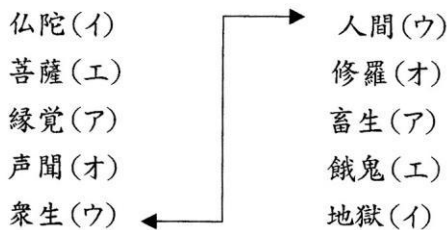
言霊原理の結論である天津神籬、天津太祝詞図の母音の並びは上からアイエオウと並びます。この並びを上下にとった百音図を作りますと、上下の中央の横の線を境に言霊図は全く対象となります。この百音図を昔、百敷の大宮と呼びました。この百音図を構成する対称の上下の音は何れも同じ音であり、実相も同じであります。その状況は全く違って来ます。上は光りの世界、下は影の世界、上は高天原、下は黄泉の国、上は言霊自覚の世界、下は無自覚の世界であります。

こうお話ししても分りにくいかも知れませんが、仏教の六道輪廻の教えを例に引きましょう。この図は人間の心の進化の順序、下からウオアエイを上段にとりました。仏教ではその進化を衆生(ウ)、声聞(オ)、縁覚(ア)、菩薩(エ)、仏陀(イ)と教えます。下段はそれと対称的に上から人間(ウ)、修羅(オ)、畜生(ア)、餓鬼(エ)、地獄(イ)と示されます。上段は仏教自覚の世界で、下段は無自覚の世界。上下対称のそれぞれの行為の内容は似ていますが、境涯は全く極楽と地獄の違いとなります。(ア)の項を例にとりましょう。上段の(ア)は縁覚の悟りの次元です。心の一切の束縛から離れ、心の自由を得た初地の仏の自覚の境涯です。ところが下段の(ア)は畜生界であります。自由に振る舞うこと畜生のごとく、大小便を垂れ流し自由、善悪の識別もなく傍若無人の行動となります。他の(イ)(エ)(オ)(ウ)の諸次元についても同じ事が言えます。

自覚の有無、光りの有無が想像もつかない相違をもたらすことをご理解いただけるではありませんか。

人間とはその心がけによって神ともなり、また、獣になるとはこのことを言うのであります。またこの人間の分際を知り尽くした皇祖皇宗の人類歴史創造の経緯のご苦心も窺い知ることが出来るというものであります。

「高山の末、短山の末に上りまして」の高山の末は言霊アであります。言霊アの境地に視点を置くと物事の実相を最もよく見ることが出来ます。



・ ・ その 77 に続く

ひふみ神示 11 サブタイトル身魂の洗濯

その 77

「よく世の中の動きを見ればわかるであろがな。汚れた臣民あがれぬ神の国に上がってきているではないか。いよいよとなりたら神が臣民にうつりて手柄さすなれど、いまでは軽石のような臣民ばかりで神かかれんぞ。早う神の申すこと、よく聞いて生まれ赤子の心になりて神の入れ物になりて呉よ。一人かいしんすれば千人助かるぞ、今度は千人力与えるぞ、何もかもアクの仕組みはわかりているぞ、いくらでも攻めて来てござれ、神には世の元からの神の仕組みしてあるぞ、学や知恵でまだ神にかなうと思うてか、神にはかなはんぞ。

この方この世のあく神とも現れるぞ、閻魔とも現れるぞ、アクと申しても臣民の申す悪ではないぞ、善も悪もないのぞ、さばきの時に来ているのにキづかぬか、その日その時裁かれているのぞぞ、早う洗濯せよ、掃除せよ、磐戸はいつでもあくのぞぞ、善の御代来るぞ、悪の御代来るぞ、悪と善とたてわけて、どちらも生かすのぞぞ、生かすとは神のイキに合わすことぞ、イキ合えば悪は悪でないのぞぞ。この道理よく肚に入れて、かみの心早うくみ取れよ、それが洗濯ぞぞ。」

読み解き

物質科学文明に浸った(伊耶那美 客観的世界 対象物を壊して分析する世界)言霊ウ・オの生存競争で栄えた西洋の文明が日本に逆輸入されてからすでに2000年ほとんど日本の臣民も影響を受けていることを云っています。生まれ赤子の心になってとは古神道での中今と言われる今という瞬間に心に向け考え事を全くしていない状態を指します。そうするとその人の身体に神が入り手柄を立てさせてやると云っている。これは父韻が言霊工のならばになり、どんなこともスルスルうまく行くとのこと。

悪の仕組みはわかりているぞ、神には世の元から神の仕組みしてあるぞ、今行われているのもこうなることが分っていたのです。天津日嗣の経緯に基づいて動いているのです。学や知恵とは言霊ウ・オの世界のこと言霊工には手が出せないのです。

この方(神)のあく神とも現れるぞ、闇魔とも現れるぞ、アクと申しても臣民の申す悪ではないぞ、善も悪もないのぞ、さばきの時に来ているのにキづかぬか、ここは今コロナ禍さらには太祝詞にあるように、這う虫の禍(バッタ・羽あり・蚊・となりの国では虫騒ぎ)で世界が大変な状況になっていますが、この動きも含め霊的世界が大きく動き始めている。人間の今の行動(肉体的世界)を変えざる得ないような事がこれからもどんどん増えてくるであろう事を言っている。だから早く心の洗濯をなさいと。岩戸はいつでも開くとは言霊工の心になれば岩戸が開けると云うこと。善も悪もなく調和の世界ぞ。というkとか

・ ・ その78に続く

ひふみ神示 11 サブタイトル身魂の洗濯

その78

「日本の国は小さいが天と地との神力強い、神のマコトの元の国であるぞ。洗濯と申すのは何事によらん、人間心すてて仕舞いて、知恵や学に頼らずに、神の申すこと一つもうたがはず生まれ赤子の心のうぶ心になりて、神の教え守ることぞ。ミタマ磨きと申すのは、神から授かっているミタマの命令に従ふて、肉体心すててしまふて、神の申すことにそむかん様にすることぞ。学や智を力と頼むうちはミタマは磨けんのぞ、学越えた学、智越えた智は神の学、神の智ざと云うこと判らんか、今度の岩戸開きはミタマから、根本からかえてゆくのざから、中々ぞ、天災や戦ばかりでは中々らちあかんぞ、根本の改めぞ。小さいことと思うていると判らんことになると申してあろがな、この道理よく肚に入れて下されよ、今度は上中下三段にわけてあるミタマの因縁によって、それぞれに目鼻付けて、悪も改心さして、善も改心さしての岩戸開きざから、根本からのつくりかへるよりはどれだけ難しいか、大層な骨折りざぞ。叱るばかりでは改心出来んから喜ばして改心することも守護神にありてあるのぞぞ、聞き分けよい守護神殿少ないぞ、聞き分けよい悪の神、早く改心するぞ、聞き分け悪き善の守護神あるぞ。この道の役員は昔からの因縁によりてミタマ調べて引き寄せて御用さしてあるのぞ、めったに見当くるわんぞ、神が綱かりけたらなかなかはなさんぞ、逃げれるならば逃げてみよれ、くるくる廻ってまた始めからお出直しで御用せなならん様になって来るぞ。ミタマ磨け出した

ら病神などドンドン逃げ出さず。出雲の神様大切申せと知らしてあること忘れるなよ。子の年真ん中にして前後十年が正念場、世の立替へは水と火とざぞ。」

読み解き

日本の国小さいが天と地の神力強い、とは日本語を使う「霊の元の国」つまり日本語には母音と父韻の組み合わせで出来ておりその言葉は氣の流れが着いており、現象として現われる言葉からである。

「人間心すてて仕舞いて、知恵や学に頼らずに、神の申すこと一つもうたがはず生まれ赤子の心のうぶ心になりて、神の教え守ることぞ。」とは人間心とは生まれたときに先ず現われる欲望主体の心次に育つ経験知の主体の心を捨ててしまつて言霊エの心で中今に生きよと言うこと、この心を天照大神の心と言います。日本の国旗が示しています。その国なのです。

出雲の神様大切とは物質文明も大切と言うこと精神文明と物質文明が合わさつて第三の文明に進むのが今なのです。ということ

三段の御魂に分けてあるからとは手襷挂くる伴男（言霊エ）、靱負ふ伴男（言霊オ）、劔佩く伴男（言霊ウ）のことでしょうか

比礼挂くる伴男 言霊イ

比礼とは霊顕（ひれ）とも書きます。霊である言霊が眼で見て顕れるようにしたもの、の意で、神代文字、麻邇名の事です。「挂く」とは掲げるの意。「比礼挂くる」とは五十音言霊図、または言霊の原理によって世間の生産物、文化を検討するの意となります。

世界文化と言いましても、ウオアエの四段階の別があります。言霊ウに属する人間性能より産出される現象の構造・時所位（次元）は天津金木音図に参照してその実相が調べられます。以下言霊オの文化には赤玉音図が、言霊アに属する文化には宝音図が、そして言霊エの文化現象には天津太祝詞音図が適用され、検討が行われます。比礼挂くる伴男とは以上のごとく、政治の鏡である五十音言霊音図を掲げ、この鏡に則り諸文化現象を検討し、その実相を見定める役職のことでもあります。

手襷（たすき）挂くる伴男 言霊エ

手襷（たすき）とはまた手次とも書き、古代手の指を次々に折ったり、伸ばしたりして数を数えることでもあります。伊勢五十鈴宮は五十音言霊をお祭りする宮であり、奈良の石上神宮は五十音の言霊を操作・活用する五十の手法を祭る宮であります。その石上神宮に昔から伝わる「一二三四五六七八九十と数えて、これに玉を結べ」という言葉があります。五十音の言霊の動きを数で示すとき、この数を数霊（かずたま）と呼びます。この数による動き方を手の指の動きで示すことを手襷（手次）と言ったのでした。でありますから、比礼挂くる伴男が、各地で生産されてくる諸文化を、五十音図に照らしその実相を明らかにしたものを、次にどのように摂取し、社会一般の福祉にどのようにしたら役立たせる事が出来るか、の言霊原理の活用によって、すなわち手の指折り伸ばしすることによって見定め、決定する役職が手襷挂くる伴男であります。すなわち言霊エの実践智の仕事です。

韃負（ゆきお）ふ伴男 言霊才

韃（ゆき）とは矢を入れて背負う道具です。矢は人間に向かって飛んで行くもので、人の言葉の言葉、言霊に喩えられます。比礼掛くる伴男、手襷掛くる伴男、によって、言霊原理に基づいて国民に発布される命令が決定されますと、それをそのまま言霊理論としてではなく、国民に理解され易い比喩・表徴または種々の概念的な言葉による法律・法則として国民に伝える役職のことです。これは言霊才の働きです。

劔佩く（たちは）伴男 言霊ウ

韃負ふ伴男の韃が実際の矢の容れ物ではなく言葉の表徴であったように、この劔（たち）も武器としての太刀ではなく、霊的判断力である霊劔または節刀の意味であります。韃負ふ伴男によって宣布された社会の法律・法則を人間社会の中で国民に接することによって現実に執行する場合、それぞれの事情が異なり、同じ状況のものなど何一つありません。それに対応する執行者のその時、その場の適切な判断力が不可欠です。劔とはその場の判断力の事を指す言葉であります。法律が一般社会に直接触れる場での仕事でありますから、言霊ウの役職と言われます。

・ ・ その 79 に続く